雲土器

くもかわらけ

神主・奈良県立大学客員教授
岡本彰夫
OKAMOTO Akio

おかもと・あきお
1954（昭和29）年奈良県生まれ。國學院大學文学部神道科卒業後、春日大社に奉職、春日大社権宮司（2015年退職）。奈良県立大学客員教授、放送大学客員教授。著書に『日本人よ、かくあれ』（ウェッジ）など多数。

平成五年頃の事だったと思う。大学の大先輩にあたる、天理大学教授・近江昌司先生から電話がかかってきた。近江先生は考古学かと思えば、興福寺田楽頭坊の研究をされたり、『本朝弩考』なる手弓の研究もされるという、正に博覧強記を地で行く学者で、正に江戸時代の学者を彷彿とさせる方である。その用件は、天理教の真柱（しんばしら）・故中山善衛氏が、自らの結婚式に用いた、「雲土器」を御子息の婚儀にも用いたいと、その調達を依頼されたとのこと。私もその時点では雲土器なるモノを全く知らなかったし、興味が湧いて来たので早速、神社出入りの土器を焼く信楽の加藤柿紅堂のご主人にお伺いすると、早速一枚の見本を持って来て下さった。

素焼の土器の中央に、いわゆる雲華（うんげ）、黒いボカシの様な模様が浮き出た、丁寧な造りのものであった。加藤さん曰く。この雲華を出すために、あるモノを挟んで重ね焼にするらしく、それは秘伝だそうで、やり方は一応承知しているものの、一度もやったことが無いので、雲が出るかどうかの保証は出来ず、とにかく一度試し焼きをしてみようとの事であった。かくして一ヶ月程経って加藤さんから丁重なお断りがあった。こうなると益々想い断ち難く、色々調べてみると、かつては京都の深草焼あたりが一大生産地であったことが判明し、京都の心安い装束屋の主人に依頼して探索してもらった。結局今は一軒も雲土器を造れる窯は無く、親爺がやっているのを見たことがあるとか、爺さんがやってたなあとかであった。かくすること数年を経てほぼ絶望していた頃、赤膚焼の窯元、JR大和郡山駅前にある香柏窯の楽斎・尾西安蔵翁が、孫の啓至さんと拙宅を訪われた。当時お歳は八十五歳ぐらいであったかと記憶している。赤膚焼の名工・奥田木白のことや、昔の窯仕事のことなど承っていたところ、ふと雲土器探訪の件に話しが至った。翁は毅然として私の方に向き直られ、「何言うたはりマンネン！。戦前迄春日サンに、雲土器納めてタン、この私でんがナ。」と、思えば灯台下暗し、戦前まで春日大社でも雲土器を使っており、かくも近くに雲土器を焼ける人が存在したのである。もちろん即座にその焼成をお願いしたのは言うまでも無い。翁は自らは老いたので、この孫にやらせて見ようと快諾して下さった。諸々承ると、雲土器は素焼であるが故に、窯元からすれば、どこまでも半製品のために、正当なお代は頂戴出来ない。加えて雲華を出すためには、製品をツルツルに磨き上げねばならず、その手間が大変であるのと、火の引き加減が難しく、五分火を引くのが遅ければ、まっ白となって雲華は出ず、反対に五分火を引くのが早ければ、まっ黒になると言う。かくしてこの土器は誰しも作る事を厭い、ついには姿を消さざるを得なかったのだろうということであった。

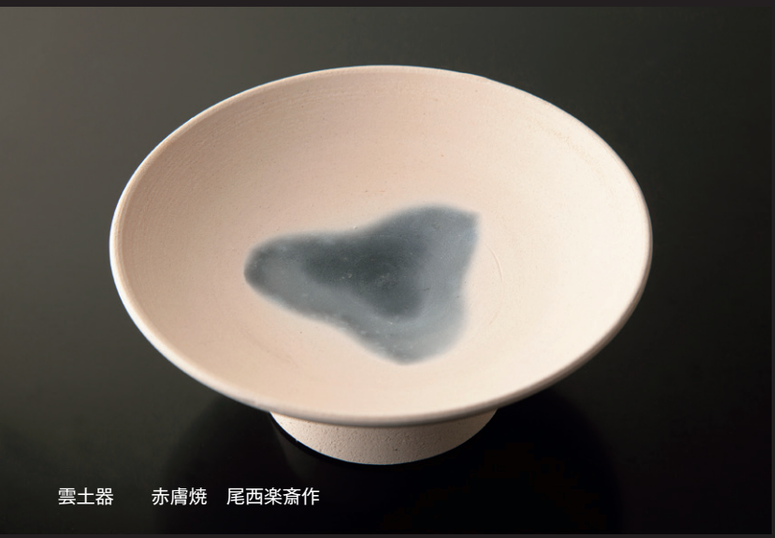
楽斎翁の薫陶を受けて、啓ちゃんは二窯失敗を繰り返し、やっと焼成に成功してくれたのである。

折りしも平成十年、春日大社がユネスコの世界遺産に登録されたこともあり、この雲土器を記念品に用いたし、婚礼の祝杯として日本で唯一用いることに成功した。

この話が広まったのか、お隣の東大寺さんが、毎年正月の修正会終了後、祝賀の神酒を頂く際に使っている雲土器（「クモ」とおっしゃっていた）が、何十年も入手叶わず、まっ黒になっているのでと、注文されたし、東本願寺さんも正月祝賀の盃の注文があったそうである。さすが京の東本願寺の品に相応しく、盃台の部分には猪ノ目の透しがある優美な品であった。

歌舞伎の「妹背山婦女庭訓（いもせやまおんなていきん）」の「山の段」で吉野川を渡す婚儀の祝盃が、まん中を墨で黒く塗ってあったので、おそらくこれも元は雲土器であったことがわかる。

とにもかくにも、幻の祝盃が復元出来たのであるから、広く江湖の人々に愛用していただかないと、又しても歴史の彼方に埋没してしまうから、末永く守り伝えるためにも、是非祝盃として用いて頂ける事を念願する次第である。



雲土器　赤膚焼　尾西楽斎作

雲土器　型

雲土器　明治28年　京都製品

撮影：岡下 浩二